

硫黄島の戦いを日本民族の魂として永遠に伝える

北岡 正敏
まさとし
神奈川大学名誉教授
歴史工学研究所所長 工学博士(京都大学)
きたおか
まさとし
79歳



1. 日本人は硫黄島での戦いが世界史に残る重要な戦闘の意味を理解していない

現在の日本人には硫黄島の戦いがいかに重要な意味をもつてゐるのか理解できていない。米国のアーリントン墓地の近くに立つ海兵隊記念碑の巨大な彫像がある。硫黄島の摺鉢山に星条旗を建ててゐる6人の兵士を記念している。これは民族の誇りを示すものである。同じように日本人にとつてもこれほど重要な戦闘はなかった。日本人は硫黄島の戦闘がなぜ起き、全兵士が武士道にそつて戦い、国家と天皇のため、家族・親戚・友人・恩師や故郷のために尊い命をなげうつて死んでいったことを忘れ去っている。人は命をかけるに値するもののために生きている。戦争は個人の良心の問題で解決できるほど単純で素朴なものでない。戦争は国際紛争を解決するための、巨大な努力である。平和、平和と題目をとなえても平和は実現できない。戦争は文明が生み出した国際紛争を解決するための一手段である。戦争は、ある日、ある時、ある所で突然起きたものでない。硫黄島の戦いはアジア解放のため戦つた世界史的にも歴史に残る重要な意味をもつ。ここでは、硫黄島の戦いが後世の日本人に永遠に伝えなければならない戦闘であつたことを述べる。

民族の歴史とは戦争の歴史である。戦争の最終的な解決は話し合いで解決できない。いまも世界中で問題を解決するために戦争をしている。硫黄島の戦いは建国以来の米国が戦争をした中で最も激しい戦闘であった。硫黄島で戦つた日本軍の全兵士は大東亜戦争の目的がアジア解放という重大な意味をもつていてそれを理解していた。総指揮官の栗林忠道中将のもとにアジア解放という大義のため哲学や宗教を超えた魂の戦闘集団になっていた。民族とはその国の連続した歴史の中にある。民族の精神を忘れた国は必ず滅亡する。たつた一度の戦争で精神的にへこたれる民族は地上から消えてしまう。日本人はユダヤ人の心の魂であるマサダの砦の精神と硫黄島での戦闘の意味を学ぶ必要がある。マサダの砦

2. 大東亜戦争は世界史を変革した

日本は戦後、GDPでは世界第3位の経済大国になり豊かな生活を営んでいる。これは米国の軍事力により国が守られ、国家予算の中で軍事費の比重が小さくなつたことがあげられる。しかし、もっと重要な要因は大東亜戦争で日本がABC（米英中蘭）包囲網というブロック経済を破壊したことが大きい。戦後、アジア諸国は白人の植民地支配から解放された。それぞの国は独立国家として繁栄している。これを実現したのは大日本帝国であつた。大東亜戦争においてマレー半島から始まつた英國との戦争で日本軍はシンガポールを陥落させた。シンガポール陥落こそ白人による世界の植民地支配の終焉を示す歴史的大事件であった。世界を支配してきた白人国家のイギリスとアジアやアフリカに植民地をもつっていた同じ白人国家のオランダ・フランスはアジアから撤退した。有色人種の住む植民地の諸国が独立し、世界が自由に貿易できるようになり、豊かになった。もし、大東亜戦争が起きなければ、アジアやアフリカはいまだに暗黒の植民地で生きることになつたであろう。その後に起ころる独立戦争では悲惨な状況が起きたことが想像できる。

3. マサダ砦から民族の誇りを学ぶ

とは西暦70年にユダヤとローマとの5年間の戦争で首都エルサレムが陥落したとき、一部のユダヤ人が立てこもった巨大な城である。西暦73に2年間の戦争でローマ軍部隊はマサダ砦に突入した。ローマ兵が砦に入ると、突入の前に籠城していたユダヤ人は全員が自決していた。ユダヤ人は奴隸となるより死を選んだ。その教えはユダヤ人に民族の魂として親から子へと伝えられてきた。

4. 硫黄島は日本人のマサダ砦

硫黄島の戦いで総指揮官の栗林中将以下の守備隊は全滅した。しかし、硫黄島で戦った一人一人の日本人の精神もマサダ砦で戦ったユダヤ人も民族の精神は同じである。日本人は武士道精神にそつて戦った。日本人には武士道という民族の宝がある。それを教えたのが内村鑑三である。彼は明治時代の最高の知識人であった。彼は「武士道は日本人の道である。これは日本道徳である」と称している。また日本民族に武士道精神がなくなると民族は滅びると予言している。内村は武士の中で八幡太郎源義家を高く評価している。その理由は彼が日本武士の中でも勇敢で、寛大で、謙遜で、弓を能くし、歌を能くし、獅子の如くに猛く、婦人の如くにやさしく最高の日本男兒であるとみていた。総指揮官・栗林忠道中将こそ源義家の心をつなぐ武士道の鑑であった。世界の戦史上でも稀な名指揮官であった。

5. 硫黄島の戦闘は2度起きた

日本軍は硫黄島で2度の激戦をした。最初の戦闘は米軍の上陸前の「地下陣地の構築」と「洞窟式交通路」の工事から始まつた。それは弾薬を使わない肉体の戦闘であった。2万2千人の兵士と一部軍属は雨水しかない火山島で食糧もなく硫黄水を飲みながら地下陣地の構築のための戦闘をした。この試練が硫黄島の全兵士を地上で最強の軍人に鍛えた。2回目が米軍の航空機と艦砲射撃とともに上陸作戦である。2月19日の

米軍の上陸侵攻から36日間にわたる死闘が繰り広げられた。攻撃した米軍が防御する日本軍の損害を上まわった地上最大の戦いであった。

5. 1 硫黄島での武器を用いない第1番目の戦闘

(1) 日本軍は水際撃滅の方法で米軍を撃退する作戦であった

大本営陸軍部は米国の艦隊が日本の島に上陸するとき、海岸で敵を撃滅する「島嶼守備隊戦闘教令」に決まつていた。この教令は「水際撃滅主義」と略称されている。敵が上陸してくるときは水際において撃滅する。このために島の海岸線全体に陣地を設け要塞化する。また航空機のために複数の基地群を確保し、上陸する敵の上陸用舟艇にむけて航空機と船舶それに地下壕やトーチカから攻撃をする。海岸には機雷や地雷、それに鉄条網を敷設して上陸をする敵兵を機銃で攻撃する。そして、鉄条網を越えてきた兵には歩兵が空襲して倒す。このようにして海岸で敵を撃滅する戦術であった。

(2) 島嶼守備を水際撃滅から洞窟戦に大幅に変更

栗林（以下中将を省略）は硫黄島において来襲する米軍の航空機による爆撃を経験した。これまでの水際撃滅という防御思想に疑問をいだいた。マキン・タラワ・サイパンでは上陸地点への艦砲射撃で地上に出ている陣地や観測所はほとんど破壊されたことを戦訓で知った。硫黄島の地形の特色、飛行場や陣地の配置と米軍の爆撃への備えなどいろいろな角度から分析をした。そして、「洞窟戦法」という画期的な作戦計画の命令をくだした。陣地は爆撃や艦砲射撃に耐えるように地下に洞窟をつくり敵からの攻撃に耐えるようにした。栗林は後退配備への指示とともに攻撃では「出撃禁止」という画期的な方針に変更した。彼の戦術は着任後わずか6か月で決定されている。ただちに地下陣地を構築するための工事がはじまつた。

(3) 敢闘の誓い

栗林は地下陣地の構築でも兵士の先頭に立つて指揮した。また全兵士に「敢闘の誓」という戦闘の方針を書いた文章を配っている。これが硫

黄島の戦いで有名な「一人十殺」の教えである。「敢闘の誓」は個人個人が共に戦ううえでの誓いであった。栗林は一人で敵を十人殺すまでは死んではならない。兵は地下の洞窟に潜り込んで、一人になつても「ゲリラ」となつて戦うことを命令した。これまでの「バンザイ突撃」を禁止した。地下の陣地に潜んで、徹底して米軍に損害を与えることをめざした。まさに帝国陸軍始まって以来の革新的な戦闘方法であった^[2]。

5. 1. 1 陣地構築における火山島との戦い

米軍は硫黄島で起きていた日本軍の地下陣地構築での食糧と水不足によるのどの渴きと下痢、赤痢との地獄の戦闘を知らない。硫黄島は東西8キロ、南北4キロの小さな島である。島は黒い火山岩でできている。その中には硫黄を含んだ堅い黒土とサンゴの塊が混じり、島はサンゴ礁の海底から吹き上げて凝結したものである。大きな山もなく平坦地で、南西の端にある摺鉢山が169メートルで一番高い。地下壕を構築するためのセメントなどの資材は予定の4分1しか届かなかつた。トーチカや地下壕の工事は手作業で始めた。一部はダイナマイトを用いたが、工事は最初から最後までツルハシとスコップで掘つた。硫黄島はどこを掘つても強い熱気と亜硫酸ガスが噴き出していた。島は地熱が高く、穴を掘ると熱気をおびた亜硫酸ガスが猛烈に噴き出してくる。地面が深くなるほど地熱の温度が高くなつた。酸素不足とガス中毒で息切れをする。地熱の温度は40度から50度に昇り、熱さと発散する硫黄ガスのために作業は5、6分が限度で、窒息寸前になるまで続いた。その数分の間に壕内で倒れ、這いつくばつて出口までやつとたどりついた。作業は地下足袋をはいてフンドシを締めてツルハシで掘り続けた。このよう中で摺鉢山では地下7階の洞窟陣地を構築した。防空壕は深さが15メートルから20メートルで延長約18キロメートルになつた。

5. 1. 2 食糧不足と硫黄水ののどの渴きと下痢と赤痢との戦い

兵士は1か月もしないうちに日射病と脱水症状と栄養失調による下痢と赤痢で倒れた。島の周囲は米軍の艦隊に囲まれていたため輸送船による野菜や食糧の補給もできなくなつた。兵は偏った少量の食糧のみで戦つた。工事は爆撃のさながら続いた。重症患者がつぎつぎにでて、野戦病院は人であふれていた。体温が37度あまりで日に10回の下痢症状は硫黄島では健康体であった。作業は深夜まで強行された。兵隊はますます痩せ衰えた。兵士を苦しめたものは、すさまじい喉の渴きであった。それをいやすものは、塩辛い硫黄泉しかなかつた。硫黄島にときたま降るスコールでは2万2千人の兵士や軍属の水の補給にもならない。兵士は雨水を天幕で受けたり貯水槽やドラム缶や飯盒や桶で水をためて飲んだ。この時期の陸海軍兵士の1日の水の配給量は一人水筒1本分の1リットタよりもやや少なかつた。帰還者の手記では「2人で1本」と「4人で1本」という報告もある。水がないため、のどの渴きをみたすため、地下からくみあげた硫黄水を飲む。すると喉が渴く。硫黄と塩が身体に蓄積されると、猛烈な下痢を起こし、赤痢になつた。痩せこけた身体はまたたく間に衰弱した。重労働と不眠により、抵抗力のなくなつた者から順に死んでいった。栗林は兵团の軍服に地下足袋で作業を指示し、島を守る陸軍兵士と同じ食事をした。彼は赴任してから陸軍の兵士にたいして生活面で身分の上下に關係なく差をつけることを禁止した^[2]。

5. 2 硫黄島での第2番目の戦闘

(1) 米軍の硫黄島への安全第一の上陸作戦

昭和19年12月8日に航空機による爆撃と艦砲射撃が硫黄島に加えられた。この日は真珠湾攻撃の記念日であった。この日から昭和20年2月19日の米軍の上陸まで74日間にわたり連日、航空機からの空襲と艦砲射撃がはじまつた。撃ち込まれた砲弾の数は島が地上から消えてしまうほど多量であった。2月19日の早朝、戦艦8隻、巡洋艦19隻、駆逐艦44隻が

一斉に砲門を開いた。この後、戦闘機と爆撃機120機が出撃した。上陸の開始である。米軍は膨大な火薬・ガソリン・ロケット砲・火砲・戦車・上陸用舟艇・ブルドーザーなどあらゆる破壊可能な手段を総動員した。そして、6万千名の海兵隊が上陸した。沖合にいる機動部隊や支援艦艇の乗組員を合わせると総兵力は25万人になり、日本軍の約12倍になつた。上陸前に目標物を航空機による爆撃、戦艦からの砲爆撃で徹底的に破壊した。米軍は硫黄島を5日で攻略できると計算していた。その根拠は面積がわずか23平方キロの島に莫大な量の爆弾を投下し、艦砲射撃で島に生きる動植物すべて破壊できると予測したためである。第二次世界大戦で最大の艦砲射撃をおこなつた。米軍は通信手段を活用し戦車・航空機などと連携をとりながら戦つた。日本軍も上陸してくる米軍に噴射砲や迫撃砲を有効に使い莫大な損害をあたえた。爆弾を手にもつて戦車に体当たりし、「一人十殺」の教えを実践した。あるとき、全滅を待つばかりの各陣地の全残存兵が壕からで「歩兵の本領」を歌いだした。それは日本本土で待つ家族や友人・恩師や亡くなつた戦友への悠久2千年の魂の叫びであつた。

(2) 戰闘の常識を破つたシービーズ (Seabees) と呼ばれる海軍建設大隊の活躍

硫黄島にシービーズ (Seabees) と呼ばれる海軍建設大隊7千人が上陸した。第2次大戦では約26万人が建設大隊で活躍した。この大隊は海岸の上陸地点から道路を開き、戦車や砲兵隊を戦場に送り込むための道を作り、負傷者のためのテントをつくり、戦争に関連するいろいろなことを裏で動いた。彼らが戦場に持ち込んだのはブルドーザー、クレーン、道路地ならし機、ローラー、エア・コンプレッサー、大型トラック、搾岩ドリル、土砂運搬機、コンクリート用とアスファルト用ミキサーなどの大型機械である。町の電灯をまかなえる発電機、溶接機、木材から武器弾薬や薬品それに野外病院用テントなど戦場で必要なものをすべて補給した。戦場では弾丸が不足したとき、シービーズが各小隊や中隊に敵弾が飛び交う中をブルドーザーを運転して補充した。海岸では

破片や使用済みの弾薬や薬きょうや、破損した自動車や戦車の残骸を掃除し、ブルドーザーで地雷原を破壊した。飛行場の爆撃跡や砲弾跡をきれいにして飛行機が離着陸できるようにした。飛行場の爆撃跡や砲弾跡を水の蒸留装置、ボーリング装置を持ち込んだ。戦闘が18日近くなると硫黄島の蒸留装置は完成し飲料水として使用した。日本軍を苦しめた飲料が可能な蒸留水の井戸をつくつた。井戸からシャワーもできるようになつた。シービーズはダムや道路建設技師、鉱山、地下鉄工事、造船技術者、埠頭関係、高層ビルなどの技術者や労働者である。米軍は戦争とは軍人のみで戦えるものではなく、巨大な技術が必要なことを理解している^[3]。

6. まとめ

日本軍は大東亜戦争の目的達成のために戦つた。栗林中将を先頭に弾薬も水も食糧もない苦境の中で衰えた体をふりしぼり戦つた。その壯絶な戦闘意欲は民族の魂からでた叫びであつた。歴史上最大の艦砲射撃にも耐えて米軍と正々堂々と肉弾で戦い、散つていつた。戦争はもてる技術と知能との総合力の戦いで軍人だけのものではないことをシービーズの技術集団が示した。硫黄島の戦闘では上陸した米兵6万千人で、攻撃した米軍（死傷者28,686人）が防御する日本軍21,152人（死傷者20,933人）の損害を上まわつた。国家のために命をささげ、アジア解放のために戦つた日本軍の崇高な精神を高く評価しなければならない。イギリスのルイス・アレンは「ヨーロッパ人にとって認めるのが難しくかつ辛いであろうが、何百万人というアジア民族を過去の植民地支配から解放したことは、日本の不朽の功績である」という言葉の中に大東亜戦争で戦つた兵士の大きな功績が述べられている。硫黄島の戦いはマサダの砦と同じように世界史に大きな足跡を残した。日本人はこの戦いを永遠の記念碑として学校やTV・雑誌・新聞で後世に伝えなければならない。その戦いかたは後の沖縄戦やベトナム戦争などに生かされた。

参考文献

- [1] 小室直樹 「新戦争論」光文社文庫、1990年
- [2] 堀江芳孝 「闘魂 硫黄島」光人社N.F.文庫、2005年
- [3] Naval Department,"Amphibious Operations: Capture of Iwo Jima",1945
- [4] ルイス・アレン訳長尾・寺村「日本軍が銃を置いた日」早川書房、

1976